

## 7

## 〈事例2〉

かたまり堆肥を  
「戻し」に使って発酵安定

生ごみ堆肥は、よく分解・発酵した場合でも、トウモロコシの芯、ダイコンの尻尾、クリの皮、貝殻などがかたまりとなって残ります。しかし、これらは厄介物でなく、次の堆肥の仕込みに戻して使えば、分解・発酵の促進に実に有効です。

● ふるいにかけて大きい堆肥は、  
発酵促進剤として

東京の「調布・食の安全と生ごみリサイクルの会」(丸町芳夫代表)は、毎週1回会員の家庭生ごみを集め、小規模な堆肥舎で4週間堆積して、堆肥にしています。各家庭では生ごみを、前頁で紹介した「ボカシ和え」の方法で前処理、保存します。これに学校や企業の食堂から出る乾燥生ごみを2、3割加えます。それに、完成した堆肥をふるいにかけて、大・中・小の3ランクに分け、「大」を家庭生ごみとほぼ同量「戻し堆肥」として混ぜるのです。この「大」の戻しが、水分調整(酸素補給)と微生物供給の役割をして、副資材をとくに使わなくても、生ごみの分解・発酵が順調にすすみ、腐敗による悪臭発生が起らないという優れた効果をもたらします。

堆積は、底に完熟牛糞堆肥(購入)を5cmほど敷いた上に、上記の混合物を山型に乗せ、上から牛糞堆肥を1~2cm厚にかけます。牛糞堆肥の敷き布団と掛け布団は、戻し堆肥とともに水分・酸素安定とタネ菌の役割をし、切り返しなしの4週間堆積で、堆肥ができます。発酵温度は小規模なためゆっくり気味ですが、1週間で55℃に上昇します。これが長引いて10



4週間の堆積でできた生ごみ堆肥



堆肥をふるいにかけて、大・中・小に分ける